学力向上フロンティアスクール中間報告書

都道府県名	島　根　県

Ⅰ　学校の概要（１５年４月現在）

学 校 名	江 津 市 立 津 宮 小 学 校								
学　　年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学 級 数	2	2	2	2	2	2	2	１４	２５
児 童 数	５８	５１	７５	７５	６２	７８	3	４０２	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

自己をひらき、ともに生きる子どもの育成
～「確かな学力」の定着と向上をめざして～

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

・全学年・算数
児童の理解の状況に差が生じやすい教科であるため
・全学年・国語
「書くこと」「話すこと」の能力を高めるため
・５、６年・理科
児童の興味や関心、課題に応じて学習を進めていくため

（２）年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ 高め合う学習集団の中で、一人一人がねばり強くよく考えやりぬく子どもを育成する。 ○　研究の見通し ①　発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための学習教材を開発する。 ②　個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫や改善を行う。 ③　児童の学力の評価を生かした指導の改善を行う。 ④　基礎基本の定着を図り継続的な学習習慣を身につけるための工夫や改善を行う。 ⑤　お互いを認め合い支え合いながら高め合う学習集団を育てる。 ○　研究の内容・方法 ①　学習教材の開発 ・算数科、国語科において、全学年で個に応じ発展的・補充的に活用できる習熟度別（じっくりコース・チャレンジコース別等）の学習プリントを作成し、授業中や放課後、家庭学習等に活用する。 ・算数科において、算数的活動を補助するための具体物や半具体物の作成をしていく。 ②　指導方法・指導体制の工夫改善

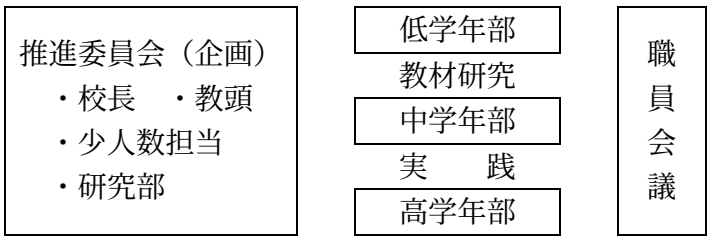
	・算数科では、すべての学級で、年間を通して毎時間２人の教員が協力して少人数授業、ＴＴ指導などきめ細かな指導を行う。 ・国語科では、すべての学級で、週１時間、年間３５時間、特に「書くこと」「話すこと」の能力を高めるために、２人の教員が協力してＴＴ指導によるきめ細かな指導を行う。 ・理科では、５・６年の各学級において、年間７０時間程度、学習課題別のグループ学習が効率的に展開できるように、複数教員によるＴＴ指導等を行う。 ③ 評価を生かした指導 ・個の学びをみとり、学習段階や一人一人の実態に応じた支援や指導と評価の一体化を目指して、ワークシートや振り返りカードを活用する。 ・ポートフォリオによる児童の変容の把握に努める。 ④ 学習習慣を身につける工夫改善 ・年間を通じて朝の読書タイムを設定し、内面の豊かさを育むとともに、週１回「読書の日」とし、保護者や職員の読み聞かせを行う。 ・年間を通して継続的に漢字や計算の練習を実施（朝タイム）することにより、児童の自主的な学習態度を養うとともに、漢字力や計算力を培う。 ・放課後において補充教室（算数教室）を設け、必要に応じた支援・補充をして行く。 ⑤ 高め合う学習集団づくり ・全教育活動を通し、道徳教育を意図的・計画的に推進していくことで、豊かな心を育んでいく。 ・生徒指導の取り組みと密接な関連を持たせ、お互いを認め合い、支え合う人間関係が築ける児童の育成を通して、高め合う学習集団を育てる。

平成16年度	○　テーマ 高め合う学習集団の中で、一人一人がねばり強くよく考えやりぬく子どもを育成する。（２年次） ○　研究の見通し 前年度の研究成果や課題を踏まえた実践の修正および実践研究内容・方法等の焦点化や拡充を図る。 ○　研究の内容・方法 ① 実践研究計画立案 ② 実践研究体制修正 ③ 児童の実態調査等の実施による前年度との比較検討 ④ 実践研究（授業研究等）の公開による成果の普及・推進およびフロンティアスクール間の実践の相互参観 ⑤ 評価方法の見直しとより適切な評価の工夫

（３）研究推進体制

実践研究については、少人数指導の担当教員が中心となって推進していった。

１・２年の担任と１名の加配教員および特殊学級担任１名の６名による低学年部、３・４年の担任と１名の加配教員による中学年部、５・６年の担任と１名の加配教員および特殊学級担任１名の６名による高学年部を組織し、学年部内での連絡調整や協力体制の確立など、きめ細かな指導の円滑な推進を図り、「確かな学力」の向上を目指した。



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

（１）発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための学習教材の開発

- 低・中学年においては、自作のキャラクターのペープサート等を効果的に活用することによって、学習に対する興味や関心を高めることができた。また、学習に対する見通しをもち、進んで学習に取り組む上でも役立った。
- 算数科においては、買い物ごっこなどの疑似体験やゲーム等を意図的に導入することにより、学習課題を生み出すことにつながった。また、話し合い活動の活性化を図る上でも役立った。
- 個に応じて発展的・補充的に活用できるような学習プリントを工夫したことで、自分の実態に合った問題を選び、進んで挑戦しようとする姿が多く見られた。また、計算の仕方にも慣れ、正確さも増してきた。

（２）個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫や改善

- 算数科においては、学年が進むにつれて理解や習熟の差が大きくなることから、指導内容を工夫しながら習熟度別少人数授業を取り入れると成果が上がった。
- 少人数授業やＴＴ指導を取り入れることで、全校の８９％の児童が、「集中して取り組める」「発表がしやすくなった」「分からないことを進んで質問できるようになった」等、学習に対して前向きに取り組むようになった。
- 算数科「図形」「量と測定」の領域では、学年を問わず、等質分割少人数の指導形態が算数的な活動を保証する上で効果的であった。

（３）指導の改善を図るための評価の工夫

- 評価カードの項目や記述の仕方を工夫し自己評価や相互評価を取り入れていくことで、子どもも教師も学びの様子を把握する手助けとなった。

（４）基礎基本の定着を図り継続的な学習習慣を身につけるための工夫や改善

- 朝タイムや朝読書の充実を図ることで、落ち着いて学習に取り組めるようになるとともに、漢字力や計算力等がついてきた。

（５）お互いを認め合い支え合いながら高め合う学習集団の育成

・ 総合的な学習では、地域単元の開発に努めるとともに、問題解決的な学習や体験活動を子どもの意識の流れに寄り添いながら設定していくことで、課題をもって主体的に学習に取り組もうとする子が増えてきた。また、発表会等の情報交換の場を意図的に持つことで、お互いの考えを認め合い、支え合う人間関係が築かれつつある。

・ 教師によるプロジェクトチームを結成し、学校行事等の見直しや改善に取り組んだことは、学校行事の活性化につながった。子どもたちは、学級集団の一員としての所属感を強めるとともに、やり遂げた後の満足感、充足感を味わうことができた。

２．今後の課題

○　複数教員による指導のよさが生かせるよう、算数科、国語科、理科の３教科の学習指導計画を重点的に見直し、より充実した教育活動を実施していく。

○　自分の実態に合った学習コースや課題を選択させていく上での教師の支援のあり方について更に追究していく。

○　一人一人の実態に応じた指導や支援をしていくために、低学年においても少人数授業を取り入れていく。また、指導過程のどの段階で少人数指導を組み込んでいくか等、単元のねらいを達成するためにより効果が上がる学習形態・指導法の工夫をしていく。

○　少人数授業は、授業内容や評価の仕方を含め、教師間の連携が重要であることから、連携の場や時間の確保に努める。

○　評価規準の見直しを図り、指導と一体となった評価のあり方を追究していく。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

○　６月、２年生以上の学年において、算数科の学力テスト（前年度の内容）を実施し、学力の定着の度合いを把握した。

○　７月、１２月、学習意欲についてのアンケートを行い、学習に対する児童の意識や取り組みの姿勢等の把握に努めた。

○　毎月（月末)、全校漢字、計算テストの実施により、漢字や計算の定着の様子を把握し、必要に応じ補充指導を行った。

○　３月、１年間の朝タイムでの取り組みの成果をみるために、漢字・計算各５０問テストを行う。

○　３月、全学年において、算数科の学力テストを実施することにより、前年度の結果との比較検討をし、今後の指導に役立てる。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○　市教育研究会主催の研修会における算数科の授業公開（６月-３年、１０月-６年）をし、市内の学校への成果の普及・推進を図った。

○　参観日での授業公開や学年・学級懇談会等を通して、保護者への実践研究に対する理解を図り、連携を強化した。

○　学校便りやリーフレットの配布等により、地域の方々や保護者へ指導方針や取り組みの様子の発信をしていくことで、理解や協力を図る。

【新規校・継続校】　　１５年度からの新規校

【学校規模】　　１３～１８学級

【指導体制】　　少人数指導
ＴＴ指導
一部教科担任制

【研究教科】　　国語
算数
理科

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　　有